東日本大震災　MSW 災害支援ニュース

JASWHS　公益社団法人　日本医療社会福祉協会
Japanese Association of Social Workers in Health Services

平成 27 年 7 月 20 日　第５巻（第２・第３　合併号）

発行：東京都新宿区住吉町 8–2０ 四谷チンゴビル2F
災害支援チーム　TEL (03)3351-5038
FAX (03)5366-1058
Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

１．　バトン寄稿　－　Ｐａｒｔ１
２．　活動報告書
３．　宮城県医療ソーシャルワーカー協会研修会報告
４．　全国大会での活動報告
５．　他団体紹介
６．　災害支援チームからのお知らせ
７．　災害支援ニュース発行のお知らせ
８．　あとがき

「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ」　発売中！！
「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ」　発売中！！
「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ」　発売中！！

詳細は“３．災害支援チームからのお知らせ”をご参照ください。

１．バトン寄稿　－　Ｐａｒｔ１

当協会の東日本大震災での活動は、５ 年目を迎えました。それぞれの時期に当協会の会員であった方々が、協力員と共に支援のバトンを紡いでくれました。そこで、今月号から順に「初代の現地責任者から現責任者･･･そして現地スタッフ」に当時を振り返ってもらうことにしました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

災害支援チーム
西片医療福祉研究会　代表　山田美代子

～引き継がれたバトンの行方、そして、石巻の今～

去る 2015 年 5 月 28 日～30 日行われた公益社団法人日本医療社会福祉協会の総会・学会（京都大会）に参加させていただき、災害支援チームのバザーやセッションに参加しました。バザーにご協力いただいた皆様、セッションにご参加いただいた皆様ありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

～～～～・～～～～・～～～～・～～～～

2011 年３月 11 日の東日本大震災から、4 年 4 か月が過ぎましたが、多くの人々が苦しみの中にいることに心を寄せ、今、私たち色の集団が何をしなければならないのか考えてみたいと思います。

私は、2011 年４月１日から日本医療社会福祉協会の一員として石巻の現地に出向き、第一期の現地責任者を担わせていただきました。未曾有の災害への対応にはマニュアルはなく、協会の災害対策本部と現地は、連絡をとりながら試行錯誤の連続でした。そして、４月後半からは、全国から石巻の福祉避難所に出向く会員の方々と共に活動が始まりました。被災地石巻の市民の方々が抱える現実問題が少しでも解決に向かうことを願っての取り組みでした。全国の医療ソーシャルワーカーは、被災地域へ飛んでいきたいという思いや使命感がありながらも、所属組織の業務調整等が容易ではなく、出向けなかった方も多いのではないでしょうか。現地を支えていただいた方法には、直接的・間接的なものがあったと思っています。事務所ボランティア、職場から送り出しのサポートをしてくださった方、資金援助をしてくださった方、この問題を風化させないような広報活動をしてくださった方など、様々なお力が働いていたと思います。

私の場合は、フリーランスのソーシャルワーカーであるという立場であり、自分の判断で仕事の調整をつけやすかったということ、現地への思いが強かったこと、家族のサポートがあったことなどの条件が整ったことで出向けたと思っています。私は、災害ソーシ

ャルワークに関する特別な訓練を受けたことはなく、ソーシャルワーカーとしての倫理綱領と積み上げてきた医療ソーシャルワークのスキルで対応しました。今、改めて振り返ってみると、災害に特化した知識や技術を身に着けておくことの重要性を感じており、当時の体験を災害ソーシャルワーク研修企画への貢献ができればと思っております。

さて、東日本大震災後、国内外で洪水・土砂崩れ・噴火・地震などが頻繁に起こり、災害を避けて通れない国土に暮らす私達であることを突きつけられたように思います。そして、長期化する復興プロセスを通して、災害が人や社会に与える影響を目の当たりにし、災害とソーシャルワークは切り離せないことを心に刻みました。私が、石巻市遊楽館で活動を開始したのは、発災から 20 日後でした。一般的には復旧期といわれている時期でしたが、街並みや住民の方々の生活、保健・医療・福祉の状況は急性期そのものであったと思います。あれから 4 年 4 か月が過ぎた今年 5 月初旬に久しぶりに石巻市を訪れました。

現地に出向いて石巻市職員の方や常駐者の話を聞くことによって、「置き去り」という深刻な問題を抱えていることを実感しました。法律で決められた仮設住宅の撤収期限は既に過ぎていますが、復興住宅や自立再建に向けた具体策が取れていない人々がいるということです。また、多くのご遺族や生活の場を失った人々の喪失体験は、物理的な喪失のみならずシンボリックな喪失感が増してきていると思われル出来事にも遭遇しました。その背景は、単純ではなく、制度政策、地域特有の課題、文化や歴史、経済状態、組織や集団、家族、個人の状況など複数の要素から影響を受けた現象であると考えます。

石巻市では、自立再建・復興住宅等への入居など、具体的計画が立ってない人々に対して、専門職と非専門職を組織化して、移行支援を試みる事業が始まっていました。4 年 4 か月経過しても、居所の決定、すなわち仮設住宅からの移行できていない人がいらっしゃるという現実をしっかりと受け止めたいと思います。そして、移行支援は医療ソーシャルワーカーが長い年月をかけ、確立してきた退院援助の応用として捉えることができ、ソーシャルワーカーの中でも、もっとも得意としていると思います。

現地の実情に触れるにつけ、外部支援者としての役割は、まだ終わっていないという印象を受けました。

第一期の支援活動では、福祉避難所（遊楽館）から仮設住宅への移行支援を行いましたが、一番難航したのは、重度障害を持つ人でも、介護認定を受けている人でもなく、公式に支援担当者が不在の特定高齢者レベル、保健・医療・福祉の制度に繋がっていない人々でした。支援の性質は、集中から分散が特徴でした。今回の移行支援の特徴は、集中していた仮設住宅から分散に向かう支援とは異なり、様々なエリアの仮設住宅に分散した人を、災害公営住宅のみならずその人の望む居所を確保し、生活再建がなされるような移行支援です。福祉避難所における移行支援とは異なる難易性があり、より深い知識や高い専門性が必要とされていることは想像に難くありません。

日本医療社会福祉協会は、発災から５年目

をめどに、本事業の終結を計画していましたが、そのことに関しては、今まさに、議論が必要です。本事業をけん引している統括である笹岡真弓（文京学院大学教授）氏は、今年３月の災害ソーシャルワーク研修にて、なぜ、石巻なのか、そして、なぜ、継続するのか、なぜコミュニティソーシャルワーカにバトンタッチしないのかなど多くの寄せられる疑問に対して、「石巻との経緯とかかわりを始めた専門職としての責任」に言及していました。とても納得できた一言でした。

ソーシャルワークの専門性の一つとして、はじまりと終結に関する適切さを判断できる能力は重要です。職能集団としての災害ソーシャルワーク実践事業は、いつか、終結の判断を必要とする時期がやってくると思います。しかし、今、石巻市への支援について、終結の時期ではないような気がしています。つまり、５年という期間の根拠がソーシャルワーク的ではないと言えます。

災害時の外部支援の原則は、支援しすぎないこと、後方支援であること、被災地域の主体性の尊重であると思います。外部支援の限界を言われる中で、未曽有の災害に応じるソーシャルワークは、方法論の模索が続いています。

被災地域では予算化が進み、専門職の募集がなされています。しかし、専門職の応募は思うようになっていないという現実があるそうです。我々外部者は、被災地域のリアリティを受け取り、考え、行動を繰り返す中で、今ここにある、支援ニーズについてしっかりと見極め、必要とされる社会貢献事業を展開していくべきだと思います。外部支援者だからこそできるこが山のようにあると言えます。

現地の状況を中心に据え、現地と外部支援者との相互理解・相互尊重を大切にしながら、引き継がれたバトンの着地点の再考が必要であろうと思います。

今後を見据えた場合、ソーシャルワークに関する支援は、急性期とは異なる質と量の支援が必要となり、そのための協会としての資金と人員の確保が現実的な課題としてのしかかっていることも事実であり、ミクロ・メゾ・マクロの視野を持った支援方法の展開が望まれていると感じました。公益社団法人としての責務を果たすために、理事会、社会活動部、災害支援チーム、会員（社員）、多くの理解者や協力者と共に・・・。

2. 活動報告書

菊地さんから「男のあそぼう会」支援報告です

協力員　菊地　知憲
総合南東北病院　（宮城県）
活動期間：2015 年 5 月 20 日

毎月第三水曜日。7時前に自宅を出て私は車に乗る。三陸自動車道を経由して、石巻に向かう。目的は日本医療社会福祉協会の災害支援チームのお手伝いとして「男のあそぼう会」の活動に参加すること。きっかけは昨年の夏に日本医療社会福祉協会で理事をされている先輩からの誘いであった。毎月の参加は容易ではないが、自分の中で行かなければという衝動に駆られて参加を決めた。私自身石巻市湊の出身であるが、震災以降は故郷の町並みが変わり、友人同士が集まりにくくなったこともあり、石巻から足が遠のいていた。しかし、心の中では医療福祉従事者として、郷土のために何もしないことへの罪悪感に苛まれていた。現在、私が勤務する総合南東北病院は宮城県岩沼市（仙台空港がある）も津波で大きな被害を受けている。震災当初から１年位は同じ法人内の地域包括支援センターに勤務し、被災した地域包括支援センターの支援、介護福祉課の窓口業務、避難所の巡回、仮設住宅等の訪問活動、そして宮城県社会福祉士会の石巻市における支援活動に参加したが、いつの間にか日々の業務に追われる日々を過ごしていた。そのような状況のなかで、
今回の誘いは何らか必然性を自分の中で感じたのは事実である。

初めて災害支援チームの事務所にお邪魔した時のことはとても印象に残っている。パワフルな女性たちが熱くケースについて語り合い、強い熱気を帯びていた。業務に同行するなかで、地域や生活の場におけるソーシャルワーク実践が行われており、非常に高いスキルが要求されることがすぐに理解できた。慣れない地で、被災地のために懸命に支援する姿に感銘すると共に、微力ながら支援を行なわなければいけないという気持ちが強くなったことを覚えている。

主たる私の活動は「男のあそぼう会」の参加である。私は毎回参加者のＡさんと話をするのを楽しみにしている。Ａさんは参加者の中で最高齢であり、社長、長老的な存在である。Ａさんは沢山の話をしてくれる。それを聞くのが何よりも楽しい。Ａさんの話は石巻の歴史の一部を切り取った話だからだ。Ａさんだけでなく、他の方も私の知らない石巻を教えてくれるそれが何よりも有り難い。それだけでもここにくる意味が私にはある。参加者自身もそれぞれの中に「男のあそぼう会」に参加する意味があるのだと思う。そしてこの会が震災によって大事なものを失った男達が生きて行くための大事な要素の一つになっている。

現在課題となっているのが、宮城県医療ソ

ーシャルワーカー協会としての支援の在り方である。平成２７年度も引き続き、災害支援チームを支援する方針が決定された。５月２６日（火）宮城県医療ソーシャルワーカー協会の定例研修会での畑中氏、岡村氏、松川氏から活動報告をしていただき、２３名の会員が参加した。参加者の多くは活動内容について初めて知った人も多く、実際の内容を聞くことができて非常に良かったという感想が多く聞かれた。また今月の協会ニュースにおいて、災害活動の支援の参加者を改めて募る予定である。

被災地で働くＭＳＷは日々の実践のなかで、被災者の支援を日常的に行っている。業務外で現地に足を運ぶことは大変であり、震災にあまり触れたくないという心理も理解できる。震災の問題は被災地で働く我々にとっては知らず知らずのうちに常にそれを背負っていることであるから。震災の体験を語り継ぎ、次なる震災に備えること、そして変化する被災地及び被災者の状況を知り、自分に何ができるのかを考え、実践することがソーシャルワーカーにとって大切であることを今回の活動を通して学ぶことができた。

最後に震災直後から日本医療社会福祉協会が石巻を支援してくださったことに石巻出身者、宮城県医療ソーシャルワーカー協会の一人として感謝申し上げます。

３．宮城県医療ソーシャルワーカー協会研修会報告

５月２６日、宮城県医療ソーシャルワーカー協会主催研修会に
当協会から現地担当３名と西田氏が出席しました
石巻担当　岡村の報告です

現地担当
岡村　翠

～～～　宮城県医療ソーシャルワーカー協会の研修での発表を経て　～～～

５月２６日に宮城県医療社会事業協会の研修にて、石巻市での災害支援について報告をさせて頂きました。宮城県協会からも、たくさんの会員さんが協力員として、この活動を直接支えて下さっていたり、日々の個別ケースでご指導いただいたりすることもあり、「今更ながら」の報告にならないようにと思っていました。また、今回の発表に向けては、発災当初とは異なり、日常生活に震災による影響が溶け込み、見えにくくなってきた中で災害ソーシャルワーク活動を表現する事のむずかしさを実感していることで、災害支援チームとして複数回の検討を重ねました。

発災以降、医療（病院）という枠組みを飛び出し、地域で医療ソーシャルワーカーとして活動してきたことは、治療継続、維持への支援やメンタルケアのみならず、復興公営住宅入居支援という活動を通して、住生活環境

の再構築が災害ソーシャルワークのみならず、被災地の医療ソーシャルワーカーにも必要であることがわかりました。同時に、仙台赤十字病院の広瀬さんの発表から、日本赤十字社が担ってきた役割を今、DMAT という機動力の高い医療チームを確保し、危機的な状況下でも医療を提供できる体制づくりが進んでいることを改めて理解しました。

石巻現地では、石巻で様々な被災経験を持つ中軽度障害を持つ方の話を伺う中で、全ての避難所にソーシャルワーカーが配置できたら良いと思うようになりました。広瀬さんはDMAT の構成メンバーにソーシャルワーカーがいると医師のために良いのではないかと話されていました。私たちの医療ソーシャルワーカーの技術は緊急時においても、様々な立場の人に対して効果的に働く可能性が高いことを確認しました。

研修最後に研修参加 SW 達の震災時、それ以降の日々の業務においての体験を話す機会がありました。ここでは、被災県においては、まだまだ震災が続いていることを教えてもらいました。

4. 全国大会での活動報告

京都での全国大会では、現地職員が活動報告をしました。

現地責任者
畑中　良子

平成 27 年 5 月 28 日～5 月 30 日、第 63 回日本医療社会福祉協会　全国大会、第 35 回日本医療社会事業学会が京都府にある京都産業会館「みやこめっせ」で行われた。

災害支援チームは大会 3 日目の 9：00～10：30、石巻での活動報告を行った。

テーマは『東日本大震災、3.11 から５年目の春を迎えて～ソーシャルワーカーの活動報告及びディスカッション～』、参加者は約 60 名～80 名であった。

まず、石巻市の概要と福祉的避難所である遊学館での活動から在宅被災者、仮設住宅入居者への支援など、2013 年度までの活動内容を笹岡統括から報告を行った。

その後、現地スタッフからの報告として、2013 年度から行っているグループワーク「引きこもりの子を持つ親の会」「男のあそぼう会」について岡村氏から、復興住宅への移行支援、その中で出会った事例については松川氏から、今年度から始まる仮設住宅被災者自立生活支援事業については畑中より報告を行った。

時間経過と共に SW へのニーズが変化し、市の関係課や協働している団体へ変化していっている事が視覚的にまとめられた事は一つの成果であったと感じている。

「男のあそぼう会」については何度かこのニュースでも紹介しているが、中高年の独居男性を対象に社会参加、生きがいづくりを目的とし、開催している。グループの発足期からどのように発展してきているなど、会の変化についても報告した。今年度になり、当協会の単体事業となり、メンバーの方にも準備等、出来る事を担ってもらっている。メンバー同士での会話が増え、メンバー自身が楽しんでいる、と私たちが感じる機会が増えている。復興住宅への移行支援では、申請書類が多く、ご自身でその手続きを勧める事が困難で入居を諦めるという方々がいた。そこで SW が一緒に行う事で、不安が解消された方や次の生活を見据えた行動が起こせる方もいた。ほんの少しのお手伝いで自信が付き「やってみよう。」と思える事、そんな支援を行っているのだと実感している。

今年度から始まった「仮設住宅被災者自立生活支援事業」は自立する方法や時期について判断できかねている住民に対し、専門職が訪問し、仮設住宅を退去してからの住まいや生活を考えていく事業である。石巻市での仮設住宅入居率は未だ 70%以上であることから、この事業はまさに SW の力が発揮できる事業だと思う。限られた期間の中で、その方の生活課題を解決しながら、「暮らし方」を一緒に考えていく。この姿勢は自分の所属が病院でも施設でも地域でも同じなのではないか？対象者のそれまでの「暮らし方」を尊重し、「これから」を考えていける SW が今も後々も必要だと思う。

震災から 4 年が過ぎ、被災地の今にも、そしてそこで行われている活動にも関心がなくなってきていると思います。

今回は報告会という形で多くの SW に活動を知ってもらえる機会があった事に感謝し、もう一度、「自分たちに何が出来るか？」を考えてもらえた事に繋がったのではないか？　と思います。石巻での活動は続いています。是非、ご自身の目で、現地をみてください。そして、現状を体感して欲しいと思います。現地でお待ちしております。

5. 他団体紹介

今年度から開始される「仮設住宅被災者自立生活支援事業」を受託する団体の一つである医療法人仁泉会の紹介をしたいと思います

医療法人仁泉会　（SG　GROUP）

【活動について】

医療法人仁泉会は石巻市からの委託を受け、平成 24 年度から仮設住宅や民間賃貸住宅に入居されている被災者、在宅被災者の生活相談やこころのケアを行っている。平成 26 年度までは保健師、看護師、精神保健福祉士の３名体制で、保健師は河北総合支所、看護師は河南総合支所、精神保健福祉士は本庁へと配属され、各関係者と協働し、活動していた。

継続する委託事業は平成 27 年度からは１名体制となり、精神保健福祉士が本庁へ配属され、仮設住宅被災者自立生活支援事業の自立生活支援専門員として保健師が従事している。

【経過】

2012 年４月	仁泉会　石巻事務所　開設 被災者対策保健活動支援事業　及び　被災者相談支援事業の受託 （保健師１名、看護師１名、精神保健福祉士１名の３名体制）
2012 年 10 月	石巻市健康・生活復興フォーラムへの参加 タイトル「みなし仮設住宅の現状」で今後の課題等の発表
2013 年４月	被災者対策保健活動支援事業の継続受託 （保健師１名、看護師１名、精神保健福祉士１名の３名体制） 昨年度の被災者対策保健活動支援事業及び被災者相談支援事業を一本化
2015 年４月	被災者対策保健活動支援事業の継続受託 （精神保健福祉士　１名） 仮設住宅被災者自立生活支援事業受託 (保健師　１名)

リンク：http://www.jinsenkai.com/shien/torikumi02.html

6．災害支援チームからのお知らせ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【1．協力員募集】

現　　地

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆　　引き続き以下の内容にて募集いたしますので、ご協力下さい。　☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

現在、１日にあたり上限２から３名で募集しております。
現地までの旅費・交通費は自己負担をお願い致します。
活動日程つきましては下記のようにお願い致します。
　　期　間：　平日**３日以上**、
　　受入日：　**期間を満たす曜日**　　**（土、日、祝日は活動致しません。）**
但し、上記以外であれば支援活動が可能な場合は現地担当までご相談ください。
　※　出発２日前までには（到着時刻等を含めて）は必ず現地担当にご連絡ください。
今後、活動に参加される方でその年度初回参加時には、簡単な資料を郵送致します。
ホームページに活動カレンダーを掲載しておりますのでご覧下さい。

事　務　所

引き続き募集しております。
平日のみの活動ですが１～２ヶ月に１回でも構いません。
ご協力お願い致します。

【2．災害支援チーム会議開催のお知らせ】

８月４日（火）19：00～21：00　　於：協会会議室

【3．書籍販売】

『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ』、
『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ』、
『東日本大震災　医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ』の
販売を行っています！

発災から 2011 年９月３０日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011 年 10 月から 2012 年１２月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地 SW との協働の記録を『バトンⅡ』に、2013 年１月から 2014 年３月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地 SW との協働の記録を『バトンⅢ』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせて頂きます。

※ご注文は注文用紙で承ります。

（注文用紙はホームページからダウンロードできます）

バトンⅠ：URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=45

バトンⅡ：URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=47

バトンⅢ：URL: http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=5

【4.facebook】

facebook でも情報をお伝えしています。現地や災害対策本部の日々の様子をお伝えしています。応援よろしくお願いいたします。

URL

http://ja-jp.facebook.co

m/pages/公社日本医療社会福祉協会-災害対策本部/156327867812970

【5.YouTube】

現地での災害支援活動の様子を前事務所担当の一原さんが VTR にまとめて下さいました。YouTube にアップしましたので、是非ご覧ください。「医療ソーシャルワーカー災害支援」で検索すると見つかります。

URL

http://www.youtube.com/watch?v=vn34I9h5rJ4&feature=youtu.be

7. 災害支援ニュース発行のお知らせ

次回発行予定　８月上旬予定

8. あとがき

災害支援チーム事務局から

編集担当　　金子

今号から 2011 年 3 月 11 日の発災以後、石巻現地において支援活動の中核を担ってきた責任者及び担当者のみなさまに順次執筆していただく予定です。

遊楽館での避難所生活から仮設住宅入居を経て復興公営住宅入居に至った被災者の方々への支援活動、また在宅被災者の方々への支援活動と多岐にわたりました。そして新たに始まった仮設住宅から先への青写真が描けない被災者の方々への「仮設住宅被災者自立生

活支援事業」を受託して支援活動の枠を広げています。

バトン寄稿第１回目の今号には、山田美代子氏に執筆していただきました。現地責任者として第１期の支援活動「福祉避難所（遊楽館）から仮設住宅への移行支援」を担当されました。どうぞお読みください。

東日本大震災 MSW 災害支援ニュース
平成27年7月20日　第５巻（第２、３合併号）
作成　日本医療社会福祉協会
災害支援チーム事務局